

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

魔法科高校の比企谷君

## 【作者名】

izanammi

## 【あらすじ】

超能力が科学によって体系化され「魔法」が一般化された時代

基本的に一人で何でもできる比企谷八幡には魔法の才能もあつた。

一般家庭で生まれておきながら、魔法の名家にも匹敵する能力

彼はその腐った目で何を見るのだろうか

キャラ崩壊を含みます

苦手な人は回れ右で……

## やはり俺の自己紹介は間違っている

かつて「超能力」と呼ばれていた先天的に備わる能力が「魔法」という名前で体系化され、強力な魔法技能師は国の力と見なされるようになった。

20年続いた第三次世界大戦が終結してから35年が経つ西暦2095年、魔法技能師養成のための国策高等学校の一つ、国立魔法大学付属第一高校。ここに今、一人の目が腐った少年が入学しようとしていた。

「なので、」

いま壇上では入学生代表がお礼の言葉を述べていた。  
司馬深雪、魔法実技テストぶっちぎりの1位である。

……ちなみに2位は俺だったりする。

国語も2位

ヤバい俺がエリートすぎる……数学？そんなもんは6点だ！

魔法科高校に入学した生徒の中で過去最低点をたたき出したらしい

……まあ、俺の話は置いてこの司波深雪とかいう奴はヤバい、何がヤバいってマジで入試でぶっちぎりだった。

何あの冷却魔法？氷の女王？人助けとかする部活作っちゃうの？

……俺は何を言ってるんだらうか？

「最後に感謝を添えてあいさつとさせていただきます」

おっと変なこと考えてるうちに終わったようだ。

こうして入学式は終わりを告げる。

さあ、楽しい楽しいLHRだ。

……何が楽しいんだよ、あの自己紹介とかいうシステムはやめないか？

なんでみんなあんな罰ゲームしなきゃなんねーんだよ。

それに、相手が自分で「私はこういう人間です」とかいうのを信じちゃダメだろ……

そんなことしてるといつの間にか高い壺を買うはめになるぞ、ソースは親父

つまり、自己紹介になんて意味はないんだ！

……そんなことを思っていた時期が私にはありました。

入学式後のHRいきなり自己紹介から入った。

皆すげー楽しそうに自己紹介してるよ、

なに？そんなだけで相手のこと本当に知った気になってんの？

脳内花畑なの？生キャラメルでも作ってんじゃねーの？

だが頭の中で反論して、いくらやりたくないといっても流れる的にやらなければならぬだろっ

いやだなあ

どれくらい嫌かと言うと帰りたいまでである。

妹に会いたい……ちなみに妹はプリチーなのだ。

むしろ目は腐っていない、むしろ輝いているね！

小町可愛いよ小町！

「では比企谷君お願いしします」

そう言っただ女の教師が俺の名前を指定してきた。  
現在では昔あった担任と言う概念はなくなった。

理由は単純で通信用デバイスが全生徒に配布されるようになったためだ。

つまり情報を伝えるための担任教師と言う存在意義がなくなったのだ。

伝統を重んじる一部の高校には存在するようだが……

そのためこの人は入学式の日から3日だけ様子を見る監督教師にすぎなかった。

ちなみに1年主任らしい

まあそんなことはどうでもいい。

今はこれをどうにかして乗り越えなければ……

頼む小町、お兄ちゃんに力を貸してくれ！

「え、えっと、おれ……じゃなくて僕はひきがひゃひゃちまんです

……よろしくお願いします」

はい、終わったー

今までの奴らは自分の趣味とか言ってたけどそんなこと知ったことじゃねえ！

何だよ「ひゃ」って、自分の名前をこんな風に噛んだこと初めてだ

！

……と自己嫌悪している間に自己紹介は終わったようだ。

後はガイダンスしてとりあえず終わりっ！

「じゃあ、自己紹介を聞いて何か質問のある人はいますか？」

出たこのパターン、これはあれだ。

気になった異性に質問をし、気にとめてもらおうっていうリア充た

ちの遊戯だ。

どうせ俺には関係ないし寝ようかな？

いいよね、どうせ聞いてても関わることなんてろくにないんだし

……

昨日は夜までアニメ見てたからねみーんだよ。

入学式前日に何してんだろ……

「じゃあ、いいですか？」

そう言って手を挙げたのは一人の無口そうな少女だった。

……まあここにはもともと少年少女しかいないんだけどな、教師以

外……

「比企谷君の趣味って何ですか？」

……比企谷君？

へえ、俺と同姓の人っていたんだ。

「名前しか言わなかった彼だけだったので……」

え!?俺も名前しか行ってないんだけど？

……はいはい、解りました俺のことですよどうせ。

なんなのこの人？

俺のこと好きなの？

それともいじめの標的にでもしようとしてるの？

入学式の日から恥かかせてやろうとかそんな感じ？

「……は、はい、じゃあ比企谷君、答えてください」

教師が急いで座席票を確認して、俺を指名してきた。

座席票確認って……

大人だったら全員覚えてくださいよ。

何のための自己紹介だったのだろうか？

「……」

っておい趣味か、どうしよう。

人間観察とか言ったら間違いなく引かれるよな？

別に引かれるのはいいが、ここで変に目立つのは得策じゃない。

もう、妹をめぐることでいいかな？ いいよね！

……そっちの方が間違いなく引かれるか

妹？

あ、そうだあいつがいるじゃん。

「えっと、猫のせいで……」

「そうなんですか？ ちなみに先生は犬派ですよと言つことで時間もなくなってきたしまったのでガイドンスに入っちゃいますね」

これあれだな。

時間がないのは本当だろうけど、実際は空気読んただけだろ。

まあ結果的に俺も救われたけど……

あのままだったら間違いなく変な空気になってた。

取り合えずあれだな、あの無口そうな奴は俺の「絶対許さないノート」に記すことにしよう。

ほんの数ミリだけ持っていた高校生活への期待はやはり裏切られた

これは魔法科高校の入試テストの日のことだ。

「わーっってるって、っていつかなんで入試について妹に色々言われないといけないの？お兄ちゃんそんなに信用ない？」

私は校内に緊張したまま、入ろうとするとそんな話し声が聞こえてきた。

「…………だから何なんだよそのポイント制は…………じゃあきるぞ」

私が彼を見たのはこの時が初めてだった。

彼の濁った目と口のニヤケ具合は忘れられない（主に恐怖でだけど）

だから実技テストで一緒の班になった時、すぐに分かった。緊張しているのか何故か話しかけづらかった。

そうこうしているうちに出番が来て、魔法を発動する。

このテストでは1000 の物質に魔法でどこまで温度を変えることができるかのテストだ。

私は1862 つまり862 の温度変化をさせた。

ちなみに言うと合格ラインは筆記の結果にもよるけどだいたいは500、一科生ならば650と言つところだろう。

私の次は彼の番だ。

…………一緒に入試を受けた人の結果を知りたいと思うのは当然のこととで、荷物をまとめる振りをしながら横目で覗く。

彼は機器の前に立つとポケットからViOaの様な端末を取りだして身体の前に構える

CAD…………サイオン信号と電気信号を相互変換可能な合成物質である「感応石」を内蔵した、魔法の発動を補助する機械。

その中でも見たことないようなタイプだ。

「ま、マイナス!?!」

監督の人の口からびっくりしたような声が聞こえてきた。

そうして私も驚く。

マイナスと言うことは少なくとも1000 は下げたということだ。

説明でされた物質の比熱(1 変化させるためのエネルギー)は5

$k_j$

つまり5000  $k_j$ のエネルギーをあの一瞬で与えたのだ。

2tの車が200~300kmで壁に衝突したときのエネルギーと同じ……

それともう一つ気になったことがあった。

基本的に私たち魔法師は近くでだれかが魔法を発動した時、どのような魔法かは解らなくても気付くはずなのだ。

今回はそれがなかった。

CADを構えたのを確認すると全く魔力を乱すことなくいつの間にか魔法が発動されていた。

はたしてそんなことが可能なのだろうか、

「あの、彼の名前はなんですか……?」

思わず、近くにいた係りの人に聞いた。

少し手元にあった名簿を確認して、係りの人は彼の名前を教えてくださいました。

比企谷八幡……それが彼の名前だった。



やはり魔法科は生徒会役員も間違っている

あー、やっと午前が終わった。

っていうかおかしくない？なんで入学初日からフルであんの？

……まあいいや、とりあえずメシだメシ。

とは言ったもののここで飯を食っているとだれかが気を使って「一緒に飯食おうぜ」とか言ってくるかもしれないからな。

そうして「こいつつままないな」というレッテルを貼られて俺も相手も嫌な思いをすることになるだけだ。

何が言いたいかと言うと教室以外に行こうということだ。

中学までは給食だったので仕方ないが高校では昼飯をどこで食おうが自由なんだ。

そう考え俺は教室を後にした。

……今更気付いたんだけど俺ってまだ人と一度も会話してなくて

？

「ちよっといいかしら？」

「……は、はい？」

私、七草真由美はお昼を食べようと生徒会室に移動している途中に  
丁度会いたかった人物のうちの一に人にあつたので声をかけた。

彼は周りを見回してだれもいないことを確認すると自分を指差し  
てそう答えた。

「そう、あなたよ、比企谷八幡君」

目に見えて動揺する。

何かしら、先輩が生意気な1年生を絞めに来たとか思われてる？  
私ってそんなことする人間に見えるのだろうか？

……ちよつとショック。

「な、何か探していたの？」

きよろきよると挙動不審にしていたため質問を試してみた。

「い、いえ、校内がどんな感じなのか見回っただけです」

入学当日からこのやる気は凄いわね……

「その手に持っているのってお弁当よね、これから少し時間ある？」

彼は一瞬凄く嫌そうな顔をしたが「は、はい」と言っ素直に従っ  
てくれた。

何よ、この子は！ちよくちよく私の心に攻撃してくるわね……

まあ何よりも彼には言わなきゃいけないことがあるから仕方ない  
か。

何この状況？

なんでこの人は俺を昼食に誘ったの？

俺のこと好きなの？

……いかん、いかん

これは中学の時によくあったあれだ。

だれにでも優しい奴に恋しちゃう奴、

忘れるな比企谷八幡。

お前にやさしい奴は誰にでも優しい、例外は小町だけだ！

……あ、ダメだ。

小町も皆にやさしかった……

俺だけにやさしくしてくれるのは俺自身だけか。

「比企谷君の家は普通の一般家庭なのよね？」

どこかに向かう途中、先輩（先輩だよな？）がそう、質問してきた。  
っていつかどこに向かってんだろ？

怖い怖いお兄さんのいるところ？

高い絵とか買わされるの？

「は、はい。だからお金は全然持ってません」

「お、お金？」

先輩は素っ頓狂な声を出した。  
あ、あれ違うの？

「私は家族に魔法師がないかどうかを聞いたのよ、っとも到着したわ、ここが生徒会室よ」

へ………？せいとかいしつ？

生徒会室!?

「せ、生徒会役員だったんですか………？」

「あ、はは。これでも入学式では挨拶したんだけどなあ」

俺が知らなかったことに対してショックを受けているようだ。

「まあいいわ、自己紹介も含めて中でしましょう。ついでに皆も紹介するわね」

……orn

自己紹介またやるのかよ……

こんなことになるなら素直に教室で食ってればよかった……

「会長は何をしてるんでしょうか……」

いつもは会長が来ていてもおかしくない時間なのにその姿が見えないなんて……

私はお弁当を先に食べたい衝動に駆られながら必死に我慢します。

だって会長つたら先に食べ始めているといじけるんですもん。

いじけないでくださいって言っても「私いじけてないもん、あーちゃんが私のこといじけてるって思ってることは何か後ろめたいことでもあるんじゃないかしら？」とか言っ**てぶっちゃけ面倒です。**

それと比べたら空腹と闘うなんて朝飯前。

……まあ昼食なんですが。

「皆、遅れてごめんね〜」

とか言ってるうちに会長が到着したようです。

「もう、私お腹減りましたよ、何してたんですか？」

「ごめんなさいね、ちょっと面白い人見つけたから連れてきちゃった」

はあ、また面倒なことにならないと良いですが……

「じゃーん、入試実技2位の比企谷八幡君ですー！」

!?

入試2位**ってあの比企谷君ですか！**

「ど、どつむ」

「あの、初対面で悪いんですけど、CAD見せてもらえませんか！何

なんですかあのCADは！全く見たことも無く驚きましたよ〜あと審査員の先生から聞いたんですが魔法の発動が解らなかつたって言ってましたがあれってそのCADの特徴ですか！そうなんですか！?

彼が入試で使用したあのゲーム端末っぽいCAD

あんなの見たことなかった。

携帯端末に近いものはあるが、ゲーム端末に近いものとなるとどうしても重くなり、邪魔である。

なんでそんなものを使っているのか？っていつかそもそもどこ製であるのか私は気になった。

「え、あ、えっと……」

「いや〜会長が『これ見てどう思う？』って入試の記録映像見せてきたときははぶっちゃけめんどくさいな〜なんて思っていたんですけどいざ見てみる……」

「あーちゃんストップ、ストップ。比企谷君が固まってるわよ、っていつかあなたそんなこと思ってたの？なんかキャラ違くないかしら」

「いやだって、非売品どころかどこにも情報がないCADですよー！」

「あなたがCAD好きなのは知ってますが昼食でも食べながらゆっくり話しましょう」

「そ、そうですね」

会長超グツジョブですー！

彼を連れてくるなんて、これは遅れても仕方ありませんね。

少しでも「先に昼ご飯食べちゃおうかな〜」なんて考えていてすみませんでした。

何なんだこのちびっこは

この人も生徒会役員？

え!? っことは少なくとも先輩？

……小町の方がまだ年上に見えるぞ

「ごめんね比企谷君、あーちゃんはこう見えてマニアなの」

そりゃ初対面でこんなに質問してくる人間がマニアじゃなかったらなんなのだろうか？

俺のことが好き？

……そんなわけないか

っていつかさっきから勘違いし過ぎだろ俺……

一応新生活で浮かれてんのかな？

「っていつかあーちゃん、他のみんなは？」

「会長が見回りを命じたんですよね、入学式当日だから」

「あーっそうだったかしら？」

だいじょうぶか？この人

「まあいいわ、この人は中条梓。生徒会書記よ、通称あーちゃん」

「そう呼ぶのは会長だけです」

「えっと、比企谷八幡です……」

よし、今度は「ひゃ」とか言わなかった。  
安心安心

「まあ細かい話はご飯を食べながら……あ、そこに座っていいわよ」

「は、はあ」

で、会長の名前はなんなんだ？  
俺は紹介されてないぞ。

「あ、あのそれですね、できればCADを……」

「は、はい」

そうやって俺は中条先輩にCADを手渡した。

「これはどこ製ですか？ふつうのCADとどこが違うんですか？」

「えっと、俺に魔法の才能があると解った時になんかどっかの組織の人が渡ってきて、俺はそのモニターをやってます、これはゲーム機と同じ形で魔法式をチップに記録させたもの入れるとその魔法が使えるってやつです」



「それってCAD自体は調整しなくていいってことですか？」

なんだこの人？

今のでそんなことわかるとか頭いいな。

「あーちゃん？どごいじいじ」と

「えっと、基本的にはCADに内蔵されている魔法式が使ったびに少しづつ狂っていくので定期的な調整が必要なんですよ……ですがこのCADは本体に魔法式がないためチップを使い捨てにすればメンテナンスが必要ないのではないかと……」

「そんなCAD聞いたこともないけど……」

「それはそうですよ、そのためのモニターなんですから、……って感じですか比企谷君？」

そんなことまでわかんのかよ、俺は初めて聞いた時理解するのに20〜30分かかったぞ。

「だいたいその通りですが、チップを使い捨てる必要はないです」

「え……？」

「チップから直接魔法を発動させるんじゃなくて、魔法式を本体にコピーし発動、チップを抜くと自動的にその魔法式が本体から消去されるんで魔法式がバグることもありません」

で、あってるよな？

っていつかモニターのこと勝手に言っているのかな？

まあ口止めしなかったあいづらが悪いってことで……

「こんな長いセリフを家族以外と話したのはいつぶりだろうか

」その代わり、普通のほどでは無いですがメンテナンスが必要です  
が……」

「でも、魔法式を保存するなんて聞いたことないわよ？」

それは当り前だろう。

そんなものレリックにだってあるかどうか。

「だからあくまで魔法式のプログラムだけです。組み立てはCAD  
にやらせてます」

そういうと中条先輩も会長も納得をしてくれたようだ。

「なるほど……メンテはどれくらい必要なんですか？」

「だいたい普通の物の4倍は持つって言ってましたけど……」

「なんかほんと凄いなんですね、私も欲しいですー！」

目をキラキラさせながら俺に言ってきた

そんなこと俺に言われても……

「それは俺に言われても……」

「ですよね？」

ほんとうに名残惜しそうな目を向けているため何とも返してくだ  
さいとは言えず……

どじやってCADを返してもらおうか考えていると会長が話を切

り出してきた

「盛り上がっているとこ悪いけど、まあ時間の都合上、私の要件を話させてもらっわね」

急に真剣な面持ちになる。

「なんですか？」

「率直に言っつて、あなた気をつけなさい」

「??」

なんですか？この展開は、

「あなたはよく分かっつていないようだけど、あなたの才能は下手すると十師族に及ぶかもしれなのよ？」

十師族

日本で最強の魔法師集団。表立つた権力を放棄する代わりに、国家の裏で不可侵に等しい権力を手にしている「その時代に強力な（優秀な、ではない）魔法師を数多く輩出している」順に選ばれた10の家系のことだ。

急にスケールのでかい話になっつて来たため俺は少しついていけない。くなる。

「そ、そんな大げさな………そんなこと言っつたら俺より成績の良かった司波深雪はどうなるんですか」

「あの娘は間違いなく十師族クラスよ」

……さいでっか。

「なんかの間違えってことは……」

「魔法科高校の入試に間違えなんてありません」

言い切る会長。

……ちなみに中条先輩はいまだに俺のCADに気を取られていた。

「まあ気をつけるだけ気をつけておきなさい、そろそろ昼休みも終わるから解散しましょ」

「解りました」

中条先輩は「え、もうですか!」とか言っているが解ってください、そうしないと俺のCADが……

「じゃあ午後も頑張っつてね」

「また見せてくださいー約束ですからねーあとこれ私の連絡先ですCADのことで質問あったら何でも言ってくださいー」

「……ほんと、今日であーちゃんのイメージが激変したわ……」

なんか会長が疲れていた。

ついでに言つと俺も疲れた。

生徒会室から出ると自然とため息が出た。

「めんどうくせえ」

魔法の才能があるばかりに小町に危害が行かないように願いな  
がHRに向けて俺は歩を進めた

やはり俺たちは夜、後悔を語る

や、やべえ  
マジでぶっしょいよ。

家で明日の準備をしていると思いだしたことがあった。  
俺の前には可愛い模様の入ったメモ用紙が一枚。  
そのメモ用紙にはローマ字の列が書いてあった。

中条先輩の連絡先だ。

「「これってあれだよな？俺が連絡しないといけないやつだよな？」

もし無視したらどうなるだろうか？

……生徒会役員相手にそれはまずい  
たしか魔法科高校の生徒会はかなりの権力を持っているって聞いたことがある。

ならばこのメールアドレスに返事を書かなければ面倒なことになるだろう。

もう返事を書くことが十分面倒なんだが……

っていつかなんて送ればいいんだ。

普通に比企谷八幡です、よろしくお願いしますでいいのか？  
それとも今日のことを少しでも触れた方がいいのか？

っていつか中条先輩ってどんな人なんだろうか。

CAD見て凄い興奮してたのしかわからん……

「そっすだ、「いついつ時は小町だ、小町に頼ろっすー」

そう思って俺は部屋を出てリビングにいるだろうと愛おしの妹のことろへ。

「あれ？どうしたの、お兄ちゃん？なんか明日の準備するとか言っ  
てなかった？」

「いやな、先輩から無理やり連絡先押しつけられたんだけどなんて  
言っでメール送ればいいかわかんなくて」

「何お兄ちゃん！女の人！そうなんだね、なんか口元ニヤケてるし  
！」

なんでわかんの？この妹は？  
っというか口元はニヤケてねーだろ。

「あ、今度は目が腐って来た」

それは元々だからほっとけ

「まあそんなことはどーでもいいんだ。その人は生徒会でな。目を  
つけられたくねーんだよ」

「連絡先をもらった時点で十分目をつけられてると思っけど……」

あれ？もしかしてすでに手遅れ？

八幡ゲームオーバー？

「そういう立場の偉い人ってだいたいほめられるの好きだから感謝  
とか言っておけばいいんじゃない？小町は先生に対してそうやって  
るよっ」

妹がずいぶん**強か**です。

……っていうか小町よ、もしかしてお前勉強できないくせに妙に通  
信表がいいのはそのせいかな？

「じゃあ小町は部屋行くね。……頑張ってるね」

最後のニヤケ顔は少しイラついた。

妹でなければそのあほ毛を引き抜いていたところだ。

「きつとお前が考えているよつなことはないぞ……」

聞こえないって分かってはいたが、思わずつぶやいたのだった。

チロリロリン

「メールだ。誰からだろう？」

知らないメールアドレスから夜メールが来た。

eitmao .

エイトマンと読むのだろうか？

開いてみる。



題名 比企谷八幡です。

今日はありがとうございました。

先輩のおかげで生徒会について少しですが知ることができました。本当に感謝しています。

さらに息詰まるHRの間に丁度いいリラックスにもなりました。

では何かあったらよろしくお願いします

「ず、ずいぶん丁寧なメールですね……」

相手は今日昼休みにあった比企谷くんでしたか、変な人じゃ無くて安心しました。

と言うか何故か凄い他人行儀な気がします、私、彼に何かしてしまっただのでしょうか？

そう考え今日の私の行動を振り返ってみる。

「あ、……え？……あれ!? わ、私ったら何やってるんですか  
!？」

相当やらかしてました……

初対面の男子に向かって質問攻め、そして魔法師の要と言ってもいいCADを半ば奪うように借りて、最後には初めて会った異性の人に連絡先を無理やり押し付けるなんて……

どうしよう? 彼にはしたくない女だっと思われていませんよね?

って、そういえばあの場所には会長もいました!

ヤバいです。ヤバいです。

見たことないCADに興奮しすぎて周りが見えていませんでした。絶対変な先輩だっと思われました！

会長に限っては私のことをどう見たのでしょうか！

急いでメールの新規作成を押し、電話帳で「七草真由美」を探します。

「づづづー、やっぱり無理ですー!!!」

しかし恥ずかしくて、結局メールを送ることはできませんでした。

「!?」

私は生れてから初めて枕を口元に充てて大声を出しました。

あ、案外これって気持ちが悪くなりますね。

この日、結局寝ることができたのはいつも寝ている時間の2時間後になってしまいました。

私は今日のことを日記に書こうと、机に向かっていた  
なんか思ったより普通の子だったわね。

……まあ、目は腐っていたけど

魔法の才能があるんだからもっと、うーん、そうねたとえば  
俺は才能があるから襲われたって知ったこっちゃありません！  
的な返しを予想してただけだな

あれじゃあ普通よね。

下手したら普通の人よりも自信ないのかもしれないわ。

うん、ナチュラルに私の心を抉ってくる以外は全然只の一般生徒。  
あれだけの才能を持っていながら普通にふるまうってある意味す  
ごいわね

あれは傷ついたなあ〜

結構考えたんだけど「生徒会長挨拶」

内容を聞いてないだけじゃなくて、私の顔すら覚えてくれてないな  
んて……

でも、彼との会話は結構楽しかったのよね。

え!?

楽しかった?

自分で言っておきながらちよつと驚いたわ。

でも、ナチュラルに心抉ってくる彼との会話が楽しいって……

え?

ち、違うからね

私はそんな変な性癖持っていないわよ!

そ、そんなことより! あーちゃんよ。

なんなのよあれは?

私の知ってるあーちゃんはCADが絡むと確かに熱くなるけど、あ  
そこまでキャラが崩壊したのは初めて見たわ。

明日になったら私はいつも通り彼女と接することができるかしら  
?

今からちよつと不安だわ

いい加減寝ちゃいましょう

起きていたらきつと変なことばかり考えてしまっわ。

頭の中で「わたしはMじゃない」「ってひたすら唱えていたら、結局寝ることができたのはずいぶん遅くになってしまったのだけど……

## やはり俺の溜息の数は異常だ

なんかもう色々と疲れた入学式の翌日重い足を引きずりながら何とか魔法科高校の校門をくぐった。

結局あの後中条先輩からの返信はなく、機嫌を損ねてしまったのではないかと内心びくびくしていたりする。

……だ、大丈夫だよな？流石に入学生を絞めようなんて生徒会役員の人が思っわけないよな……？

朝から億劫な気分のまま俺は教室を目指したのだった。

教室についてみるとまだ朝のHRまで30分以上あるのに殆どの生徒が登校を終えていた。

あれだ、

高校生活に期待を持っているため、楽しみで早く登校してしまったのだらう。

きっと一週間もたてば半数以上は10分前ぐらいに登校するようになるだらうが……

俺？

そもそも期待なんて持ってないんだから関係ないだろ？

むしろ一刻でも長く家にいたいまでである。

俺が早く来た理由は単純に妹が日直でそれに合わせて出てきたにすぎない。

小町のいない家を俺は家とは呼ばない。

「何考えてるの？目がすごい勢いで腐ってる……」

!?

急に話しかけられたため驚いて背筋を伸ばす。

「そこまで驚かなくても……」

そこにいたのは昨日俺に質問(苛めともいう)をしてきたおとなしそうな女子だった。

何この人？

なんで俺に話しかけてくんの？  
っていつかそもそも目が腐ってんのは元々だ。

「あの、なんかようでひょうつか？」

俺の口！

しっかり働け

その代わり俺は働かないから！

「……何考えてたの？」

「いや、皆早いな」と……」

「それはまだ二日目だから、そうなる。私は寝ていたかったけど……ほのかが「それはダメ！」って言われて」

なにこの会話？

友達なの？

この人俺の友達なの？  
って言うか「ほのか」って誰？

「あ、そうですね……」

「……」

……

……

……

ち、沈黙が痛い

これが気まずいからこれからはできるだけ話しかけないでほしい。

俺がこの高校に入学したのはあくまで組織の奴らがそうしろと言ったからにすぎない。

彼らから受けた大きな恩のことを考えるとそれもやむえなかったのだ

「……比企谷さんて入試2位だよね？」

沈黙を嫌ったのか彼女はちょっと強引な話題転換をした。

沈黙が嫌いなら別の奴にでも話しかければいいのに……

話を切り上げるため違つと言おうとしたが上位5人は張り出されていたためそれもままならない。

「……」

「敬語じゃなくていい……ちなみに私は3位」

じゃああれか、北山……下の名前なんだっけ？まあいいや

「で、その北山さ……北山が俺になんか用か？」

敬語じゃなくていいんって言っただったら、めんどくさいし、ため

口で行こう

「うん、あなたの魔法ってどうなってるの？」

「??どっしりっ」とだ??」

俺は彼女の前で魔法を使ったことがない。

だからあのことについて彼女が知っているはずはないのだが……

「入試の時、同じ班で少し見ていた」

ああ、なるほど。

そっすいっことが。

「なんであなたの魔法は発動が解らないの？」

「ああ、……まあ秘密ってわけでもないからいいか。おれ

「はい、着席しろ！HRを始めるぞ」

なんとという絶妙なタイミングだ……

「比企谷さん、昼休みに続きを聞くから……」

そう言っって北山は自分の席の方に歩いて行った。

え? ちょっと待ってくれ。

俺は昼休みくらい平穩に過ごしたいんだ。

……そんな心の声は口から発せられることなく、溜息といっしょに消えていった。



あれが雫の話していた比企谷さんなのでしょうか？

なんかその……

目が少しアレな方ですね……

私は今まで話していた友人との会話を切り上げて荷物を整理する振りをしながら横目で彼らの様子を盗み見ます。

雫はいつも通りのマイペースな感じですが比企谷君の方は何か動揺しているような気がします。

あれで本当に入試成績が2位なのでしょうか？

……別に悪口を言っているわけじゃあないですよ！

私は誰に言い訳をしているのでしょうか？

でも確かに雫の話には疑問を持つところがありました。

雫ほど魔法に秀でている者が魔法の発動に気付かないなんて……

子供のころから一緒のため雫の魔法力の高さは知っています。

それに家がお金持ちと言うこともあって、色々な訓練ができたため熟練度も他のみんなと比べて高いものでしょう。

そもそも一般家庭から生まれたのにもかかわらず私たちよりも魔法力が高い彼は何者なんでしょうか……

キーンコーンカーンコーン

はい、午前の授業は終了！

さあ、昨日は途中で生徒会の人たちに絡まれたけど、ベストプレイ  
スでもさがし……

「比企谷さん、約束……」

……解ってますよ。覚えてました。

ですけど北山さん？

一人で無理やりこじつけたものを約束とは言わないんですよ？

「……はい」

「じゃあ学食に行こう」

「あの〜俺は弁当なんですけど……」

「学食でお弁当を食べてはいけないなんてルールありませんよね

」？

!?

「それ朝と全く同じ反応」

「そりゃ急に話しかけられれば驚くだろう……」

「ごめんなさい、私は光井ほのかって言います。雫とは幼馴染です……って言っても自己紹介したんで知ってますよね……」

うん、もちろん知ってましたよ。ハチマンウソツカナイ

「ほのかも比企谷さんの魔法が気になるって言っていたから……」

はいはい、解りました。

もう好きにしてください。

そう、あきらめの意味を込めて俺は何度目かわからない溜息をついた

この高校入ってから間違いなく溜息の量が増えてる気がする。

そんなこんなで学食に移動……と言っか連行された。

学食は想像以上に込んでいて座る席を確保することすら難しい状態だ。

「……は空いてる？」

2科生が団体……とはいっても4人だが……で座っている隣が奇跡的に空いていたためすぐに雫が確認を取った。

「ああ、空いてるよ、さっきの人たちが丁度今どこかに行ったところだ」

「だって」

いま表情があまり変わっていなかったけど間違いなくドヤ顔したよな？

なんとなくイラつく。

「じゃあ比企谷さんは待っててください、私たちは注文してきますから……」

「お、おつ」

マジですか？こんなところにしかも混雑している中4人席に俺だけ残してどっか行きますか？

見るよ、なんか先輩らしき人が明らかに「1人なのに4人席に座ってんじゃねーよ」って感じで見てきてすんですけど……

もしかして俺はあの2人が帰ってくるまでこの針のむしる状態ではないかならないの？

「比企谷って比企谷八幡か？」

そう、さっき雲がした質問に答えてくれた男が聞いてきた。

「え、ああ、しょうだけど」

なんだよSHOWってなにか面白い事でも始まるのか？

「そ、そうか、俺は司波達也だ。実技テスト2位なんて凄いな……」

「お、おつ、ありがとう……」

「どっしたんだよ達也……あ？この目つきの悪い奴は誰だよ」

いや、お前がだれだよ……

そついうこと正面から言われると意外と傷つくもんなんだぜ？

「何言ってるのよ、ガラの悪いあなたに目つきが悪いとか言われ

……確かになんか残念な感じね」

ほっとけ！

「み、みなさん！そんなことを初対面の人に言うのは……あつ

……」

あんたが一番失礼だろ!?

「こいつらは西条レオンハルト、千葉エリカ、柴田美月だ……んで  
こっちが比企谷八幡」

何こいつ？

何当たり前のように皆に紹介してんの？

って言うかこれがリア充のスキルか……

恐ろしい。

恐ろしすぎて真似しようとは思わない。

「そついえば実技上位にそんなような名前の人がいたような……」

眼鏡をかけた女子……柴田さんが頭をひねりながらそつ言った。

「こいつがそついうこぞ……」

「?!?!」

……なんなのこいつら

ほんと帰りたい

俺のこと馬鹿にしすぎじゃないか？

って言うか俺はさっきから何もしゃべってないぞ？

内輪ノリは内輪だけでやってくれよ……

「お待たせ……」

「待たせてすみません」

「お兄様！」

おっと待っていた2人が来たようだ。

……2人？

なんか1人多いような……

そう言っただけで声のした方を見ると、新入生総代の司波深雪が司波の隣に立っていた。

なんだこの二人は双子ってことか？

まあ従兄妹ってことも考えられるけど……

「ちょっと待ってよ司波さん！」

「ごめんなさい、私はお兄様たちと昼食を食べようと思つので皆さんとは一緒にできません」

うわ!?

マジかよ

こいつらトップカーストの連中だよ。

まだ高校生活始めて2日しかたっていないけど俺の勘がそう言ってる。

……俺のサイドエフェクトがそう言ってるぜ  
って言うか皆がいる中でよくこいつココに来れたよな。  
1科生と2科生の間にある大きな確執……  
このことを考えてまた大きなため息をついたのであった。  
俺は高校生活をただ無難に乗り越えたいだけなのに……

やはりも、もり、森垣？の理論は破綻している

「司波さん、これは一科生と二科生のけじめだ！」

「おいおい、ちょっと待てよ。今は授業中でもないんだ、本人の意思を尊重すべきじゃないのか？」

ガラの悪い西条が司波深雪に意見を言っていた生徒に向かって言い返す。

「あ？二科生フュードのときに僕たちに口答えするな！」

……おいおい、流石に言いすぎじゃないか？

あくまで試験で測ったのは基本的な魔法力の総量だけだ。

こいつは自分の才能に自信を持っているタイプの人間だな。

「比企谷さんて弁当は自分で作ってるの？」

北山は北山でマイペースだ。

こいつは間違いなく大物に違いない。

見る、光井なんか隣の騒動に関与するべきか知らないふりをするべきかあたふたしてるぞ……

「なんでこいつなんだよ……」

面倒くさいことが多すぎる。

俺はこの高校に呪われでもしているのだろうか？

俺は隣で喧嘩が起ってる中、普段通り飯を食うほど神経は凶太くないのだ。



チュルチュルチュル

「うん、このごんは意外とおいしい……」

「こいつは図太いにもほどがあるが……」

「って言うかお前！もう昼食を食べ終わったんだったらさっさと教室にでも戻ってるよ！」

「は？お前何言ってるんだ!？」

西条の奴もいい加減キレそうになっている。

こんな時リア充（笑）の司波は何やってんだよ……

と思つて顔を向けたら奴は凄い勢いで飯を食っていた。

……なんなの？

なんでこいつも神経図太いの？

「ごちそうさま……レオ、悪いなエリカ、美月、俺たちは先に教室の方に戻ってる」

「え、ああ、わかったわ」

そう、千葉は答えた。

なるほど、食べ終わったという名目で先に帰り問題を有耶無耶にしよつてことか、

「待てよ……」<sup>コウキ</sup>科生のくせに謝りもしないで逃げるって言うのか……

おい、お前空気読めよ。

もうこのまま解散して昼食を取るって流れだったたる……

流石にこの言い草に我慢できなくなった人物が一人いた。

「ちょっと、いい加減にしてください！」

今まであたふたしていた、光井だ。

「は、ほのかさん？」

流石に同じ一科生のそれも異性に言われたからか今まで喚いていたりダーっばい奴もたじろぐ。

……って言うか光井、

お前がそのままアタフタしているだけだったら俺たちはそのまま無関係でいられたのに……

「さっきから聞いていればなんですか！その言い草は流石に変だとは思わないんですか!？」

「何言ってるんですか？僕たちは当り前の主張をしているだけです。魔法科高校では一科生が上で二科生は下なんです。あなたも知っているでしょう！」

やべえ、こいつやべえ。

何がヤバいって当たり前のことみたいに言ってるところが一番ヤバい

「だからってそれはおかしいですよ……」

あ、こっちもこっちでヤバかった。

感情論では相手を言い負かすことはできない。

こっとなってしまった時点で光井の負けだ。

「二科生こいっせだって分かっていたはずだぞ！」

「ですけど……ですけど……」

光井はすでに少し涙目になっている。

「比企谷さん、どうにかして……」

おい、こいつは俺に振ってきますか。

って言うか飯は食い終わったんですね、北山さん……

まあ、いいか。

このまま時間を浪費するのはもつたいない。

それに見知った女の子が泣きそうな顔していると、飯がまずく感じるんだ。

「はあ、メンドクせえ」

溜息がこぼれる。

溜息すると幸せが逃げるといふならば俺の中の幸せはもつすでにすっからかんだ。

まあそもそも溜息程度で逃げる幸せなんかいらないが……

「一科生は6550、二科生は500……」

「??」

立ちあがってリーダーっぽい奴に言う。

「ひ、比企谷さん？どうしたんですか」

急に俺が立ちあがって何か言いだしたから、驚いたのだろう、光井

はそつ質問した。

「これが何の数字かわかるか？」

しかし俺は構わず続ける。

「入試の項目の内のひとつ……最大温度変化エネルギー量の試験、その合格ライン」

別に北山に問題を出したわけではないんだが……まあ正解だ

「そ、それがどうしたっていうんだよ！」

何を言われているのかわからないだろう、完全に動揺をしていた。

「何？分かんねーの結局お前らは150程度の差しかないって言うてんの」

「は？何言ってるんだ、150も差があるんだろ！そもそも僕は750を越えたぞ！」

俺の言いたいことが分からなかったらしく逆に自信を取り戻したようだ。

「俺の記録は1162だ」

魔法力だけは人と比べて数段高い俺は相手を苛立たせるように表情を変えずに言い放つ。

……ちなみに司波深雪はこのテストを1273……つまりカンストしている。

「!?.....何が言いたい」

「だから言っただろ、お前らには150程度.....いや250?.....  
まあそれぐらいしかねーんだよ」

この男の神経を逆なでするためにあえて言いなおす。  
ちなみにいつでも魔法の発動をできる状態にはしておく。

基本的には魔法の個人使用は校則違反なのだが正当防衛となれば  
話は別だ。

まあ俺の場合使ったところで怒られるようなことはないのだが

「何?あんたたち仲間割れ?」

ニヤニヤしながら指摘する千葉。

何言ってるんだ?

そもそも仲間じゃないから.....

「その程度の差でブルーム?ウィード?だいたいおまえらは

「はい、そこまで　　!一年が問題起こしてるって職員室  
に連絡があったから来てみたらあなたたちですか!」

何なんだよこの教師。

まだ2日立っていないのに俺のセリフを遮るの3回目だぞ?

「比企谷、なんか面白そうな話をしていたようだけど入試の成績は  
魔法力を測るためだけのもんだ。私たちから見たら学生なんて全員  
ひよっこだ。それに森崎、ブルームとウィードという言葉は校則で使  
用が禁止されている、以後気をつける」

「つつす」

「…………はい」

すげースタイリッシュだなこの人。

昨日は猫を被っていたのか

って言うかこいつ森崎って名前なんだ…………わーどつでもいい〜

「お前たち、早く飯を食わないと午後の授業に間に合わんぞー!」

そう言って先生は学食から去って言った。

「僕はお前には負けない、入試の結果がすべてだとは思わないことだ…………」

そう言って彼は他の一科生と一緒に遠くの方の席に移動をした。

そのセリフは先ほどの自分に向けるべきだがそんなことは言わない。

…………これ以上の面倒事は御免だ。

「まあ一応感謝はしておく」

「お、おっ」

席を立つたまま傍観に徹していた司波に最後声をかけられ、司波はそのまま学食から出ていく

西条は何も言わずに司波の後を追った。

睨みつけられたのは気のせいだと思いたい。

時間を見てみると1時間近くあった昼休みは残り15分となっていた。

「あ、あ……………」

「どっししたの？ほのか」

「私、ラーメンだったんだけど……」

急いで光井はどんぶりの中から麺をすくいだす。

そこにあっただのは細いうどんレベルまで膨れ上がったラーメン（細  
麺）

光井はさっきとは違う意味で再度涙目になっていた

やはりも、もり、森岡？の理論は破綻している

「比企谷さん、結局昼休みは聞けなかった。このまま放課後……」

今日の講義も終わり、帰りの支度を整える。

そんな時に北山がこんなことを言ってきた。

勿論いやだ。

俺は早く帰って小町に会いたいのだ。

「いや、ほらあれだからね……」

「??じゃあ早く荷物まとめて……」

何この子？

俺が遠まわしにに断ってるの分かんないの？

「そういえばそうですね。じゃあ喫茶店にでも行きましようか？

……昼ご飯があんなのでしたし……」

光井の昼飯はスープがたっぷり滴ったラーメン。

……「ご愁傷さま。

って言うかあなたも俺の意見を無視しますか……」

「じゃあ今から校門に集合で……私たちは先に行って待っています

ね」

いや、だから俺に拒否権と言う物を下さいよ……

こうして俺は直帰することができなくなってしまった。



「いい加減あきらめたらどうなんですか！深雪さんはお兄さんと一緒に帰ると言っているじゃあないですか！」

……………だれだ、校門前集合なんていいだしたやつは。

「そうですね、皆さんで一緒に帰ればいいじゃないですか」

……………だれだ、今めんどくさい事に自分から首をつっこんで行ったあほは。

「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

とは、森なんとか君

「そうよ、司波さんには悪いけどちょっと時間を貸してもらっただけよー」

絶対悪いなんて思っていないだろこれ……………

当の司波深雪は兄貴と一緒に傍観役に徹しているし……………

まあ口を出したら余計に場を引っ掻き回すだけか。

「だったら先に深雪に許可を取っておくべきじゃない？そんなことも分からないであんたたちは高校生になったの？」

おっおっ……………

千葉の奴はかなりの毒舌だな……………

一瞬、世界線を越えてだれかと顔が被るところだったぜ。

……………俺は何を言ってるのだろうか？

「うるさい！ウィード」ときがブルームに口出しするなと昼にも言ったはずだ！」

「だったら私も言いましたよね！あなたたちの言い草はおかしいです！」

同じ一科生の光井の奴が大きな声で森……森山に言う。

「光井さん、昼休みは言いませんでしたがあなたはブルームです。しっかりとその自覚を持った方がいいと思いますよ……」

こんなときにも同じクラスの女子に丁寧な対応するとかマジでこいつはプライドの塊だな、おい。

って言うか今更だが北山の奴はどこに行ったんだ？姿が見当たらないけど……

俺？

俺は校舎の陰に隠れて様子をうかがってるだけだよ？早く先生来いよ……

「お前たちには一度格の違いってのを見せておかなきゃならない様だな」

「おもしれえ、見せてくれるって言うなら見せてもらおうじゃねーか！」

「そうね、ほのか、あなたは手を出さなくていいわよ」

「え？ちょっと校内での魔法の無断使用は……」

なんでお前は急に真面目になってるんだよ光井……  
あれ？って言うかこれヤバいんじゃない？

流石にこれ以上はヤバい。

昼の一件が教師たちに知られているんだったら、このメンツが問題を起こした時、俺も間違いなく関係者だと思われてしまう。

このまま帰っちゃおうかな……

って校門で対決してるから帰るに帰れないし……

……よし、このまま無理やり抜けよう。

俺のスルー（され）スキルを見せてやるぜ！

俺だってこれ以上のトラブルは御免なのだ。

って言うかトラブル自体嫌だ。

漫画の方なら大歓迎だが……

「なんだ、ヒキタニ？お前か、少しすっ込んでろ！」

一発ではれたし、こういつ時にどうして発動しないんだよおい……

って言うかヒキタニ？

だれそれ？

「これは教育だ。一科生が二科生に実力の差つてものを教えてあげるだけさ！君には手出ししないでもらいたい」

だからお前は何さまだ。

これだからプライドの高い奴はやりにくい。

って言うかあれ？

俺はこのまま無視して帰ろうとしたただけだぜ？

なんでこんなことになってんだ……

「比企谷さん、流石に魔法の退陣発動はまずいです、止めましょう」

「！」

光井はなんで急に手のひら返して止めようとしてんの？

しかも他力本願だし……

メンドクせえ、もういいや

仕方がなく俺は魔法を発動する準備をする。

得意魔法を……

「特化型!？」

森元の取りだしたCADは特化型と言うタイプのもだった

CADは大きく特化型と汎用型に分けることができる。

特化型は魔法式を9までしか収納できない代わりに攻撃に優れ、汎用型は99もの魔法式を収納できる代わりに魔法発動に必要な術者の魔法力を通常より大きく使用する。

まあこのハイブリットが（試作品だが）俺のCADと言うわけだ。

まあ何はともあれ、攻撃に優れているCADを他人に向け魔法を発動するということは殺人未遂と変わらない。

それほどまでに魔法と言う物は危険なのだ。

「お兄様!？」

「いや!? ちょっと待つんだ深雪!？」

司波深雪は兄に何かしてもらおうと呼びかける。

しかし、司波の方は何かに気づいたようだ。

……なにあいつ、俺の魔法に気付いたの？

……

……

……

「あ？なんで魔法が発動しないんだ どうなってる!？」

「おいおい、マジで発動させる気だったのかよ……  
下手したら退学だぞ？」

「そんな森園を無視して達也はキョロキョロと周りを見渡す。  
そうして俺と眼があつと、そのまま近づいてきた。」

「さっき何かしていたのはお前か？ひき……」

「お前ら ……1日に2回も同じことで怒られたいのか!？」

「……司波、ドンマイ」

「意外とショックだよな、無条件でセリフを遮られるって言うのは

……

「ひ、比企谷君に達也君!？」

「あなたもいたんですね、会長……」

「まあ生徒ののいざいざを解消するのも長の役目ってやつですか

……

「って言うかこの人はなんでこんなに動揺してるのだろうか？」

「……いい加減名前を教えてほしいものだ。」

「こほんと咳払いをすると彼女は顔つきを変える。」

「……CADを出していただけで魔法の発動はしなかったみたいなので今回は嚴重注意で済ませます、あなたたちは昼休みにも問題を起こしていたようですね……3度目はありませんよ」

「会長はその場にいた全員にそう告げる。」

「たぶんこの人は今わざと身体に魔力を集めている。」

「さつきから、その俺たち全員はその魔力量に押されて黙ってしま

う。

司波兄妹だけが平然としていた。

何あいつら？

って言うか兄の方もかよ……

妹の魔力で慣れたってことか？

「比企谷君、司波君、あなたたちは一度生徒会室に来なさい」

「……はい」

「分かりました。深雪今日は先に帰ってくれ……」

「分かりましたお兄様」

このやり取りを聞いて俺はムシヨウに小町に会いたくなった……

って言うか俺はただのとばっちりじゃないか？

止めようとしただけなのに……

やっぱり似合わないことはするもんじゃないな

「はあああ

」

溜息とっしょに悲しみを吐き出し、会長の後について行った。

やはり俺の魔法は間違っている

「ごめんなさいね、あのまま何事もなかったみたいに皆を返すと周りからの目があるからね……少なくとも何人かは注意したってことにしなくちゃいけないのよ」

生徒会室を目指す廊下で、申し訳なさそうに会長は言った。  
って言うかそういうことは言っちゃダメだろ……

「いいえ、大丈夫ですよ。こちらこそ事態の收拾をしてくださってありがとうございます」

お礼を述べたのは司波。

結局こいつは最後まで何もしなかったが……

「まさか魔法まで使おうとするなんて予想外でしたね」

「……まったく」

同調をしたのは光井と北山。

お前らは呼ばれていなかったはずだが……

まあ別に来ても問題はない、とは会長談

北山の奴はいつの間にかいたのだろうか

「そもそも俺は止めようとしただけですよ？なんで呼びだすのを森……え、えっと森山にせずに俺にしたんですか」

「だってあの子面倒くさそうじゃない、私だって暇じゃあないのよ」  
「？」

そりゃあ生徒会長は忙しいとは思いますが……  
そんなこんなで話をしているとすぐに生徒会室の前についた。

「幸い今は誰もいないからゆっくり話でもしながら少し時間をつぶ  
しましょつか」

おい、どうした。

生徒会長ってのは忙しいんじゃないのか……

「そうですね、俺も聞きたいことがありますし……」

そう言って司波は俺の方に向いた。

「まあ好きな所に座っていいわよ、じゃあ親睦会と行きましょう

……」

会長がそう言って奥の方の席に着いた。

俺はなんとなく手前の一番端の席に腰掛ける。

司波の奴は俺の隣に座る続いて光井、北山

1年4人が横に座り向き合って3年の会長が座る形となっていた。

「じゃあ比企谷、おまえがさっきやっていたことについてだが……」

何のこと？と、とぼけることは簡単だ。

だが結局北山と光井には教えるという約束（一方的だが）をしてい  
たため、いつそこそこで言ってしまった方が楽だろう。

「ああ、俺の魔法はちょっと特別でな……北山、光井、ここでもう話  
しちまっぞっ」

「さっ……」



「わ、分かりました」

よしじゃあ、と思い説明しようとするとう会長が「ちょっと待って」と制止をかけてきた。

「……………どうしたんですか？」

「それってあーちゃんも気になっていたはずよ、呼んであげましょ  
うよ」

そういえば質問を連発されたうちの一人に入ってたような気がするな……………

「じゃあ会長お願いします」

「任せてー!」

何故かドヤ顔をして張り切った様子で端末をいじる。  
今のうちにシヨンベンでもしとくか……………

「じゃあ俺はちょっとトイレ行ってくるわ……………」

そう言って立ち上がると隣の司波も一緒に立ちあがった。

「俺も行こう」

何こいつ？

ホモなの？

俺にそっちの趣味はないぞ!

「場所は解るわね?」

「はい大丈夫です」

そう言っただけで俺たちは廊下に出た……

「なあ……比企谷」

そしてすぐに司波の方から話しかけてきた。

「ん？どうした」

「深雪……妹はクラスではどんな感じなんだ？」

何言ってるんだろうかこいつは。

まだ学校が始まって2日目なのにそんなこと気にしていたら限がないぞ……

って言うかシスコンかよ……ホモじゃなくてよかった。

トイレに入り便器の前に立ちながらそんなことを思う。

だが聞かれたことには答えなければならぬ。

「悪いな、実際に話したことがないから分からん。まあトップカー  
ストにはいるんじゃないか？」

「トップカースト？……ふ、教育現場をヒンドウ教のカースト制を  
使っただけであらわしたのか、面白い考え方だな……」

え？学校カーストって有名じゃないの？

まるで俺が生み出したみたいになってんじゃないか……

「俺は先に行くぞ、じゃあな」

ポツチはトイレも早いのだ。

なぜならトイレにはよく人（しかも上位カーストの奴ら）がたまる。ちよつとはトイレを見習って流れを良くするべきだ。

だから授業が終わったら速攻でトイレに行つてやつらが侵略してくる前に教室に戻るのだ。

中学時代の俺の生態より抜粋

「ああ、分かった」

司波の奴は待ってくれとか言わなかったので遠慮なく先に生徒会室に俺は戻つたのだった。

「あの、比企谷君……、えーっと」

俺の前には茶髪ショートの小柄な女性が一人、かれこれ2分たつ。

「これは一体どういう状況なんだ？」

もどつて来た司波はそう俺たちに問いかける。

いや、俺が聞きたいわ、

急に「ごめんなさい」とか中条先輩が謝つて来たから「何がです？」「って返したらこんな感じだ……」

「あーちゃんは昨日暴走してしまったことを謝ってるんだと思うわ

よ？」

「は、はい。かいちょうありがとうございます」

できればそのフォローはもう少し早くしてほしかった。  
ちなみに北山と光井は2人で話していた。

「はあ、早く帰りたいんですけどさっさと始めましようか」

うんざりしながら、その声をかけた。

「じゃあ比企谷、さっきお前がやったのはなんなんだ？」

「簡単だ、ただ魔力の塊をひたすらぶつただけだ。こつするだけで魔法つてもものは発動しなくなる」

魔法のもとである魔法式はなかなか融通の利かないものである。  
発動する前には必ず魔力をためる必要がある。

そのたまる魔力をより大きい魔力の塊をぶつけることによって根こそぎ吹き飛ばす。

これが俺のやったことの正体だ。

……まあ魔力にある程度差のある人間にしか使えないが……

「待て、じゃあお前は魔法を発動したということか？」

「ああ、そうだ」

「だが魔力の乱れが全くと言っていいほど無かったぞ……！」

「それは試験監督の教師が言っていたのと同じです」

「雫が言っていたのも」

「……うん」

会長以外が一気に食い気味で同調をして質問を重ねる。

「ちょっと皆落ち着いて……」

「こんな時に止めに入るのは流石生徒会長と言うものだろうか……」

「まあぶっちゃけて言っちゃいますと俺はBSの魔法師です」

「BS魔法師って基本的に普通の魔法は使えないんじゃないですか？」

中条先輩は首をひねらせながら言う。

「そんなこと俺に聞かないでください、何事にも例外はあるってことじゃないですか？」

「そうよあーちゃん、日本でも何件か……世界ではそれこそ何件も報告はとれてるわ……確かにそういって珍しいことだけ」

BS魔法、魔法として技術化される以前の異能、つまり「超能力者」による先天的な超能力が、現代魔法学ではこう呼ばれている。

「つまり俺は『魔法の存在に気付かれない』と言う魔法隠蔽スキルを持って生まれたんだ」

「そんな魔法……だがそれならさっきのことにも説明がつく。俺が異変に気付いたのはあいつの身体の周りのサイオンが小刻みに震えていたからだ」

何こいつ？

魔力なんてもの見ることができんの？

ちなみに魔力＝サイオンだ。

基本的には魔法に関係するものはサイオンと呼び、一般人は魔力と呼ぶ。

ちなみに俺が魔力と言ってるのはなんとなくでしかない。

「まるで魔法を発動しようとしているのにサイオンがたまらないといった感じだった」

「俺のこの魔法は魔法式から溜めた魔力まで全てを隠蔽しようとする。だから森口の魔力を吹き飛ばした俺の魔力は認識できないんだ」

「それって……」

「実践だったら最強……」

光井の言葉に北山が続ける。

まあ確かに全く察知できない魔法なんて相手からしてみたら悲劇でしかないだろう。

だが実際はそううまくは行かない

「そんなことはない、俺はこの魔法のせいでAランク以上の殆ど魔法は発動することさえできない」

「情報を隠蔽するには高度すぎる魔法式だからな……魔法ごと隠蔽する、という感じが……」

だからなんで司波はそんなに察しがいいんだ？

魔法が高度すぎるとせっかく変えた事象すら隠蔽しようと元の状態に戻してしまうのだ。

何故か低級魔法では事象の隠蔽は起らない。

つまり炎を出す上級魔法を発動してもその炎も無かったことにされる一方、火を出す下級魔法では途中のプロセスは分からないのに火が出たという事象だけが結果として残るのだ。

「今思ったのだけどそれってよく考えたらおかしくない？」

「何がですか？会長」

中条先輩が尋ねた。

「だってBS魔法って言うのは魔法が確立されていないときからあるものでしょ？『発動した魔法を隠蔽する』なんて魔法そのものが無ければ成立しないものじゃないかしら？」

「そのBSについては知らないです」

ありのままの回答をする。

そつえばそつか……これは本当に何なんだろうつか……

「BS魔法……『超能力』も進化をしているってことか……」

感慨深く司波はつぶやいた。

「なんか他に質問はありますか？」

「じゃあ一つだけ確認……本当に魔法師の家系じゃないの？」

そう聞いてきたのは北山。

俺がこの問いに対してできる答えはただ一つだった。

「ああ」

組織の奴らに何度されてきたかわからない問に対して俺は何度しか分からない回答を返したのだった。



やはり司波兄妹はどこかずれている

比企谷八幡……

彼は何者なのだろうか？

俺は今日のことをとりあえず深雪に話そうと帰ってすぐリビングに深雪を呼んだ。

「お兄様？どうかなさいましたか？」

「比企谷八幡のことでお前に言っておいた方がいい事がある」

「あの方ですか……」

ずいぶんと苦々しい顔をするんだな……

「「「」ということをお兄様の前で言うのもお恥ずかしいんですけど……彼はなんとなく不気味なんです」

「不気味……？」

「はい、見た目が……ではありません。なんとというか、その……」

深雪は精神操作系の魔法も大きな素質を持っている。

やはり何か感じるどころでもあったのだろうか……

皆には言わなかったが俺も 分析 と 分解 のBS魔法師だ。

まあ俺の場合は生まれつきと言うよりも埋め込まれたといった方が近いのだが……

その俺でも心の 分析 まではできはしない。

「やはり、比企谷については調査をする必要がありそうだな」

「そ、それでお話と言っつのは……」

「ああ、それはな――――――――――」

その夜、俺は今日あの後あったことを全て話したのだった。

「おかしい、どうしてこれだけしか情報がないんだ？」

比企谷八幡のデータについてだ。

ハッキングなど非合法の手段を用いても彼の情報は全くと言っていいほど出てこなかった。

出てきたのは出身の学校、そのデータベースにあった成績、身長体重だけだ。

こんなものには何の価値もない……

ふと、ある場所で俺は目を止めた。

出席欄だ。

彼は小学6年の初夏ごろに小学生で唯一休んでいた。

2週間も……

普通に考えたらたまたま長引く夏風邪でも引いたのだろう。

だが比企谷は普通じゃやない

「調べてみる価値はあるか……」

「お兄様、お飲物をお持ちしました」

ノックとともに妹の声が聞こえてくる。

ふと時計を見るともう日付をまたいでいた。

少し根を詰め過ぎだろうか……

「ああ、ありがたい。入っていいぞ」

「失礼しますね……あらお兄様今日は何をなさっているのでしょうか？」

「ちょっと、調べ物を……な、それより深雪いいのか？こんな時間まで起きていて。明日もちゃんと学校があるんだぞ」

「ふふ、お兄様、もう今日ですよ。それにお兄様が何かをなさっているのに私だけ先に寝ることはできません」

そこには言外に兄俺のすることは基本的に妹深雪のためである、と語っていた。

そう、俺が人間でいられるのは間違いなく深雪がいるからなのだ。

「いじめんなれ……」

そんな俺の心中を察してか深雪は伏し目がちに謝ってくる。

私のせいで……と、

別にこんなことをした四葉を恨んでるわけではない。

むしろ深雪を守るための力を与えてくれたんだ、そのことについては感謝すらしている。

だが……

だが、深雪をこんな風に謝らせている原因を俺は許せない。

「大丈夫だ深雪、お前が気にすることじゃあない、今日はもう寝なさい。俺もそろそろ寝るから」

「……………分かりました」

伏し目がちに深雪は了承をしてくれた。

きっと彼女は俺がまだ作業を続けるといふことに気付いているんだろうな……………

きつとお兄様はまだ作業をお続けになりますよね……………

彼のことを調べるために。

先ほど言ったことは嘘ではなく、私だけ先に寝るなんて……………と思います。

ですがこれ以上起きていると結局お兄様の迷惑になってしまつう。それだけは絶対に嫌でした。

ただでさえ私はお兄様を束縛してしまつていふ……………

「私つてば本当に嫌な女ですね……………」

束縛をしているのに迷惑をかけたくないなんて……………

お兄様は昨夜も寝ていませんでした。

行動に支障が出得るようでしたら、魔法で自動的に最適化される。

それが怪我だろうと病気だろうと勿論、睡眠不足だろうと……

「だからと言って睡眠を取らなくて良いというわけではないのですよ……」

私は一人部屋でつぶやいた。

「原因不明の爆発事故？」

6月??日

千葉市で原因不明の爆発事故が発生、買い物をしていた小学4年生の女の子と小学6年生の男の子の兄妹が骨を折るなどして県内の病院に搬送されました。

警察は魔法を使用した犯罪行為の可能性も視野に入れて捜査をしています。

しかし魔法の専門家に話をうかがってみたところ「魔法の形跡が一切ありません」とのことでした。

この記事は比企谷が学校を休み始めた前日のニュースだ。

先ほど見つけた情報をもう一度見直す。

やはり……

比企谷には妹がいる……2つ下の。

それに魔法の形跡がないことも引っかけた。

「間違いないな……」

きつと彼は魔法を無意識に暴発させてしまったんだ……高すぎる魔法力のため。

そして彼が魔法を発動したということは無意識にあの魔法で隠蔽したんだ。

この事件で彼に接触をしたのだろう。

その後の情報が何もなかったということは彼のバックには何かがある。

俺のハッキングで見つからないんだ、一企業を軽々超える規模の何か……

結局わかったのはそれだけだ。

比企谷の後ろには何かがある。

そんな簡単に想像できるようなことしか分からなかったのだ。

やはり俺に昼休みは与えられない

「よう、比企谷、おはよう！」

登校から会いたくない奴にあったにあって……  
電車を降りて学校までの一本道を歩いているとそんな声をかけられた。

「お、おっ」

「なんだその返事は、朝飯は食ってきたのか？」

「いや、朝からそんなテンションでいられるあんたの方がおかしいから……」

「こっちはあくびをしながら西条の奴に突っ込みを入れる千葉。苦笑いをする柴田に2人で話しこんでる司波兄妹。」

「こいつらはなんで朝から一緒なんだろうっか？」

「いくら電車が同じだからって全員そろって……」

「それってなんてご都合主義？」

「おはよう、比企谷」

「おっ、お、おはよう？」

司波の挨拶を何とか返す。

「なんで人という物は親しくないものと話すときに疑問形になるんだろうっか？」

俺だけか？

「達也くん、比企谷くん」

「で、司波なんか用か？」

「いや、特に何もないが……」

「あれ、もしかして聞こえてない？」

いや、だってお前が今俺のことを観察するよつにじっと見てただろ？

ボッチは視線には敏感なんだよ……

だからと言って何見てんだよ！とか口が裂けても言えない。

精々できるのは見えないようなどころへの戦略的撤退だけだ。

「……で、会長。何か用ですか？」

おい、司波

そこは無視するところだろ……

もう本当にメンドクサイことは嫌なんだよ……

「ちょっと比企谷君流石にそこまで露骨に嫌な顔されると私も傷つくかも……」

「え？ああ、はい。すみません」

「何その反応!？」

こっちのセリフだ。

たかがこんなことにオーバーリアクションだろ……



「比企谷って……」

「なんだかすごいわね」

「そうですね」

西条、千葉そして柴田が見事な連携を決める。

何がすごいんだよ……

お前らが昨日学食で俺に対してやった内輪ノリトークのが凄かったよ……

主に俺のおいてけぼり感が

あ、それはいつも通りだったわ

小学校の時3人で話してると思ったらいつの間にか2人で話してたもんな〜

俺を抜いた。

……中学生の時？

そんなもん会話をするこゝと自体が稀だったわ。

「なんなのよ、もう。……深雪さんに話したいことがあるので」  
「緒してもいいかしら、司波君？」

「あ、じゃあ俺は先行くわ」

司波にだけ確認を取ったということとは俺は無関係だよな？  
変なことになる前にさっさと退散しますか……

「いいえ、比企谷君にも話したいことがありますー！」

そんな語尾を荒らげなくても……

「なんか怒ってます？」

「いいえ、怒ってませんよ？私が怒っているように見えるというなら何かあなたに後ろめたいことでもあるんじゃないですか？」

め、メントクせえ。

会長が面倒事を運んでくるもんだと思って先に登校してしまいました  
かったがまさかの会長自体がめんどくさかった……

こういういじけ方するやつには謝っても「怒ってない！」って言う  
て怒ってくるんだよ。

ソースは小町

3日間話さなかった……誰とも。

中学時代、

俺は小町以外と話すことはほとんどなかった。

だから必然的に小町と話さないととなると俺の口の機能はなくなる  
のだ。

「で、要件はなんですか……？」

こういう相手に対しては謝らずにそのまま流した方がいい。

自分で怒っていない宣言をしてしまったのだから相手は怒ること  
ができないのだ。

「……もついいです。じゃあ司波さんと比企谷君は昼休みに生徒会  
室に来て下さい」

「またか……」

俺の昼休みはどつしてこんなに簡単に潰れていくのだろうか……

「分かりました。兄も一緒によろしいでしょうか？」

「ええ、皆さんもどつですか？」

「え、えーっと」

「うーん」

「折角ですけど私たちは遠慮させていただきませう」

柴田と西条が悩んでいる中、千葉の奴が妙にはっきりとした様子で断った。

……………き、気まずい

「そうですねか…………」

だが、会長の顔は崩れない。

俺の言ったことに簡単にすねたのにこついう時は落ち着き払って  
るんだな…………

精神が強いのか弱いのかわからんな。

「では、3人ともお願いしますね。待ってますから」

そう言っただけで彼女は小走りで校舎の方に駆けて行った。

結局俺は今日もベストプレイス探しはできないのか…………

「はあ……………」

司波と溜息が重なる。

きつとこいつも色々と苦労をしてるんだな…………  
いや、知らんけど。

「どうしたんだ？真由美」

そう言って話しかけてきたのは風紀委員長の渡辺摩利、私の親友と言っても差支えないだろう。

「何が？何か私変かな？」

「いや、ずいぶんと楽しそうだなと……」

「ああ、いま知り合いにあって話してきたのよ……そうだ！摩利も昼休み生徒会室に来て。面白い後輩を紹介するわ」

「ほう、なかなか気に入ってるようだな」

「へ？」

「なんだ、気付いていなかったのか？その喜びようはお気に入りのお菓子をもらった時とほとんど同じ反応だぞ？」

気に入ってる？

私が？誰を？

そこまで考えた時に私は急に恥ずかしくなった。

今日もたくさん傷つけられたし、昨日だって生徒会室に来る時露骨

に嫌な顔してたし……

もうわざとやってるんじゃないかしら？

そんな彼を私が入ってる？

「摩利、冗談でもそういうこと言わないで……私はMじゃないわ！」

気が付いていた時にはもう私は走り出していた。

周りに摩利以外がいなかったのがせめてもの救いだろっ

私は後で気づいた。

司波兄妹も誘っていたのだからそっちを気に入っていると  
思えばよかったことに……

早くも昼休み

って言うかあれだろ？

働くときに働かないのが罪って言うなら休む時に休まないのも十  
分罪なんじゃないか？

俺のつきたい仕事？ 専業主夫だよ！

なんてことを思ったりしても結局生徒会室のは行かなければなら  
なくて……

4階の廊下の突き当たり……そこには生徒会室と刻まれたプレー

トがかけられていた。

丁度司波兄妹がインターホンを押していたので便乗するために小走り移動。

きつと今日は昨日、一昨日と違ってちゃんと生徒会役員もそろっているだろう、だからその中で一人で入りたくはなかった。

できればばれない様に後ろに隠れながら、もっとできればこのまま帰りたいまでである。

「比企谷、お前も丁度来たのか……」

「あめ」

ちなみに司波深雪の方は授業が終わった瞬間に教室を出て行った。森里が昼食にでも誘おうとしていたのかがっかりしていた。

「いらっしやい、遠慮しないで入ってきて」

ドアが開く瞬間に司波兄妹が何かに警戒をした様子だったが何に警戒をしていたのだろうか？

「生徒会のみんなを紹介するわね……特別ゲストもいるから」

一体何がそんなに楽しいのだろうか

理解に苦しむ。

それともいいところのお嬢様は世渡りをするために愛想良くふるまうようにでも教わっているのだろうか？

七草家は十師族の中でも1、2を争う名門である。

社交界にもでるためそのような処世術を一通り学んでいてもおかしくない。

まあそんなことを今考えたって仕方がない。

「はぁー」

溜息を吐きながら俺は3度目の生徒会室に足を踏み入れたのだった。

ちなみに入学してからまだ3日目だったりする。

## やはり生徒会と絡むとメンドクサイ

「どうぞ、気楽に腰掛けて。話はご飯でも食べながらにしましょう」  
そう言って会長は壁側にある機械を操作し始めた。  
自配機、まあ簡単に言うと自販機の弁当版だ。  
その名前の通りに配る機能も付いてるのだがそれは時間がかかる  
ので多くは使われなかったりする。

「お肉とお魚と精進、どれがいい？」

「魚をお願いします」

「じゃあ私も……」

「俺は元々弁当を持ってるのでいいです」

「って言うか精進で……そんなもん食べる奴いるのか？」

「じゃあ、まずは自己紹介からかしら」

「なん、だ、と」

「神は俺を見捨てたのか……」

「入学式するとき一度しているのだけど一応初対面だしね、まず私の隣にるのが市原鈴音、通称りんちゃん。会計よ」

「……私をそういうのは会長だけです」

「なんか中条先輩の時も聞いたようなセリフだな。」



まあこっちの方は確かにちゃん付けされるような感じではないな。  
中条先輩？

.....  
さ、さあ次行こうか。

「その隣は知ってますよね？風紀委員の渡辺摩利」

何当たり前のように言ってるの？

僕知らなかったよ？

「それで最後に書記の中条あずさ、通称はあーちゃん」

あれ？風紀委員には通称はないんだ.....

絶対会長にはあだ名をつけられたくない。

って言うかなんでみんな容易にあだ名をつけようとするの？

ちなみに俺のあだ名は108まである。

嘘だ。

80ぐらいだと思う。

ちなみに中条先輩は会長に自分の呼び名について抗議をしている  
が意味のない事なので割愛

「あ、できたようね」

そう言って皆は自分のトレーを取りに立ちあがる。

「あーあと、一人生徒会副会長のはんぞーくんを加えたのが今季の  
生徒会役員ね」

可哀想に、はんぞーくん

アンタ今完全に忘れられていたぞ.....

って言うかはんぞーって.....

どこかの忍者かよ。

よかった、流れるに俺は自己紹介をしなくてよさそうだ。

## 閑話休題

ここから行われたのは当たり前障りのない話

この料理はあーだとかこーだとか。

渡辺先輩って料理するんですか？

とか、

比企谷お前も料理するんだな……

とか、

主夫志望なめんな！

ちなみに俺がしゃべった言葉は「お、おう」とか「は、はい」だけだった。

どうもこういう目的のない会話って言うのは苦手だ。

こういうのをあたかも楽しく話すことこそがリア充の条件なんだろうか？

……俺はボツチでいいや、ボツチがいいや。

途中司波兄妹が惚気を発揮していた。

帰りたくなった。

でも今帰ったところで小町はいないのでぐっ和我慢。

いい加減本題に入らないかな？

なんて思っていると、やっと会長が口を開いた。

「そろそろ本題に入りましょうか……皆さんもご存じのとおり当校では生徒の自治が重視されており、その生徒を統括する生徒会には大きな権限が与えられています」

あ、あれ？

なんかいやな予感がする。

「そしてその生徒会は生徒会長に権限が偏ってるのです」

あくなるほど、自慢したかっただけね。

凄いですね。

……で、帰っていいですか？

なんて逃避をしてみても現状は一切変わらない。

「そのため生徒会長は選挙で選ばれますが、そのほかの人任に関しては全て自由なんですよ……ちなみに風紀委員とかを抜かした殆どの委員会の委員長任命権ももってます」

おいおい、「こ」までのものなのかよ生徒会長って。

実質、生徒会長になったらそこらの教師よりも権力を持つんじゃないか？

やっぱり関わりたくないな……

「ちなみに私も同等の権力を持っているぞ」

とは渡辺先輩

「生徒会が独裁に走らないようにですね……」

「その通りだ。司波」

だからなんでこいつはこんなに察しがいいのだろうか？

「私が言いたいののはここからです。毎年新入生総代を務めた人物に生徒会入りしてもらおうという伝統が続いています」

あ、じゃあ俺は帰っていいですね？

「コホン、司波深雪さん、比企谷八幡さん。私はあなたたちの生徒会入りを希望します」

「お断りします」

「早くない!？」

やっぱりこうなった。だから嫌だったんだよ。

「り、理由を聞かせてもらえますか……?」

クールそうな市原先輩が目に見えて動揺していた。ちなみに会長の方はやっぱりか〜みたいな様子をかもしだしている。

だったらもともと誘わないでほしい。

「いや、俺は新入生総代じゃないんで入る理由なんてないですよね? それだったら司波兄妹そろって生徒会入りさせたらどうですか。筆記1位はあいつですよね?」

ここで生徒会入りしたら家に帰るのが遅くなる。

そもそも俺が生徒会に入るなんてことはありえない。

そついう自己保身のためのセリフだったのだが、このセリフで火が付いてしまった人物が一人いたようだ。

「そうですねー兄の成績はほとんどが1位です。そもそも生徒会の仕事の中心はデスクワーク、知識や判断力のあるものが役員になるべきです」

おーい司波さーん。

さらっと俺のことを馬鹿にするのやめてくれませんか？  
なんて心の中で呟いてみても彼女は兄のことをヨイシヨイすること  
でいっぱいだ。

熱く語る司波深雪

だがその一方で生徒会役員たちの反応は冷めたものだった。

「それはできません」

確固たる意志を持って会長が告げる。

「生徒会の面々は1科生から選ばれます。これは不文律ではなく規則です。あなたも入学案内で確認をしたはずです」

え!?そんな項目あったっけ？

「実技にも優れている者は成績もいい。達也君のような例外はありますが基本的にその通りです。勿論入試では測れない実力があることは確かですが1科生と2科生の溝がその事実を認めようとはしません」

ああ、森下の話か……

実技が俺の方が上だからもう人間として俺の方が偉い

その考えが学校にある限り2科生を生徒会にするとそれは生徒たちの大きな不安の種になる。

1科生にとっても2科生にとっても……

こんなことは1科生である俺から見てもおかしいことだ。

だが、もうすでに魔法と言いつ訳の訳のわからないものが蔓延っている社会自体がおかしいのだからそれは仕方のない。

「規則を変えるためには生徒の三分の二の承認が必要ですが、1科

生と2科生が対立している以上半数を超えることはないでしょう」

市原先輩が会長の言葉に付けたしをする。

その声音から市原先輩……いや、現職の生徒会役員は全員がこの体制に反対であることがうかがえた。

副会長のはんぞーくんとやらはどうか知らないが……

「分かりました。過ぎた物言いをお許してください。生徒会の業務私  
でなければ精一杯務めさせていただきますのでよろしくお願いま  
す」

「「こちらこそ、お願いしますね」

「で、比企谷君の答えは変わらないんですか？」

中条先輩……

蒸し返さないでください。

このまま終わる流れだったでしょ

「はい、変わりません。俺に生徒会をやる気なんてありません」

だが何と言われようとここは譲れない。

俺には生徒会なんてやっている時間はないのだから……

「あなたの実技の成績は学年が違えば主席であってもおかしくない  
ような点数です。……理系を除いて」

最後の言葉は聞こえなかった。

アーナンテイッタンドロウナー

「すみません。ここだけは本当に無理なんです……勘弁して下さい

い

「仕方ありませんね……」

「比企谷、風紀委員もダメなのか？」

「放課後活動があるようなのは俺には無理です。それこそ司波にでもやらせればいいじゃないですか……」

「「「「」」」」」

え!? 何この沈黙?

俺なんかやらかした?

小学6年の時俺がしゃべりだしたときとまったく同じ空気が流れてるよ?

「それだー!」「それです!」「それがあつた!」

ちなみに左から会長、司波深雪、渡辺先輩だ。

「そうよ!!なんで気付かなかったのかしら!風紀委員にもデスクワークはあるわ!」

「会長!兄は腕っぷしも相当なものですよ!」

「それは本当か!?司波妹。一回誰かと模擬戦をやらせて見るのも手だな……」

何が起こってるんだ!?

なんとなく言ったことがこんなことになってるのか訳が分からない。

「比企谷……やってくれたな……」

そう司波に声をかけられ恐る恐る彼の方へ顔を向ける。

そこには怒った顔などなくただただ辟易している男子生徒の顔があった。

怒られるよりも申し訳なく思って、司波に心の中で合掌をしたのだった



## やはり司波妹の逆鱗に触れたらやばい

魔法士が魔法を使うとき、基本的に協力することはない。

よくアニメなんかで見る 協力合体技 なんてものは使うことではできないのだ。

1人1人魔法を発動させるときに必要なサイオンの周波数が違つ、つまりこのサイオンを合わせて1つの技を使おうとするとサイオン波同士でうなりのような現象が起きそのまま魔法は霧散する。

これと同じように1人で2つのCADを使う場合でも、熟練者以外の者は安定した周波数のサイオン波を出すことはできず、結果としてその微妙な差が大きなうねりになり、魔法は発動されない。

たとえ2つのCADから魔法をタイミングをずらして撃つたとしても、辺りには前の魔法の波が大きく残っていることがあるためCADを2つ使いこなすことは相当な熟練者でなければ難しいとされている。

しかしこれはとらえ方を変えると、1人で2つのCADを使うこと以外にも当てはまるのではないか？

たとえば近くで魔法を発動した人がいればそのサイオン波は辺りに広がる、それは結果として周りの人の魔法発動に少なからず影響があるはずだ。

長々と考えているが、結局何が言いたいのかというところ……

グループでの実習とかホントマジでなくなってくれないかな……

無理かな？

無理だよな……

「……………比企谷さん、私たちと組まない……？」

現実逃避している俺の前に救いの手が差し伸べられた。

北山だ。

横には光井も引っ付いている。

どうでもいいけどこの二人いつも一緒にいるな…

幼馴染っていうのはそういうものなのだろうか？

俺にはないからわからん…

「お、おう…けどいいのか？」

少し声につまりながら答える。

「???…なにが？」

Oh、北山のやつはホントに何もわかっていないようだ。

この時期(新学期の最初のうち)は新しい友達(笑)と友好関係(笑)

やお互いのキャラ(笑)を形成する大事な時期だ。

損のこと話考えていると北山の口から驚きにの一言が。

「私、比企谷さんのこと知りたい」

なんてことなさげに言う北山

「は？」

「雲?!」

と、突然何言ってるんだ、こいつは!?

同じくほのかも目を剥いて驚く。

……ほのかさん、何であなたは顔が赤くなってるのでせうか。

「同じグループになればまた魔法をしっかり見ることができるだろうし…」

その一言を聞いて光井はうれいような残念なような微妙な顔になる。

っていつかこういふ顔できるやつってホント器用だよな…  
百面相ってやつか…

「そ、そうよね、……ビックリした、零ってそっち方面に疎いから本当に驚いたよ……」

最後のほうのセリフは、俺には聞こえたが北山には聞こえてないようだ。

「……………」

クールになれ、  
kool…じゃあなかつたcoolになるんだ…。  
よし、落ち着いた。

こんなの中学の頃の罰ゲーム(もちろん俺が罰ゲームを受けたわけではない)で慣れてるはずなのに…

ガチの天然って怖い…  
いや、キャラの天然も怖いけど、別の意味で…

……………どつしてこうなった。

もう一度言っ、

ドウシテコウナッタ！！！！

「比企谷さん、何でもいいから魔法撃ってみて…」

「でもいいんでしょうか？そんな簡単に人の魔法を見せてもらっても…」

「まあほのか、実際気になるのはほのかも同じなんでしょう？」

………ホントしつこいようだけど、もう一回だけ言ってもいい？

え？ダメ？

現実受け入れろって？

現実が俺を受け入れてないのにどうやって受け入れろっていうんだよ…

よってそれは無理な相談だ。

どれくらい無理かというと牛乳に相談するレベル。

……実際にそんな奴いたら完全におかしい人なのだが。

「うん、じゃあほのかの許可も得たってことで…比企谷さんお願いね…？」

あ、あれ？俺の許可はいつ得たのだろうか？

っていうか本気で周りの目が痛い。

目に攻撃力があつたら俺の体は穴だらけだろう。

いや、現状で胃に穴が開きそうなのだが…

わー存在が認識されるってイイナー

この発展は多くの人に誘われていた司波のやつに北山が残り1人ということと声をかけたことから始まった。

なんと司波は先に誘っていた人たちを押しつけて北山の誘いのつたのであった。

おかげで俺は針のむしろです。

ちなみにグループ内でも「さっさと魔法使えや！」的な感じで針の

むしろです。

はぁ家に帰りたーい…

でも帰っても小町いない…

「はぁ…ったくしかた」「司波さん！せっかくだし僕らの班と合同でやらない？」

諦めて初歩的な魔法を使おうとすると、話をさえぎられてしまった。

俺の話をさえぎるといってあの女教師だと思っただが、聞こえてきたのは男のそれだった。

岩手県の県庁所在地だった…

あ、字が違うか、あっちは盛岡、こっちは森岡か…

ってかこいつホント気づいてないのかよ…

司波のやつは思いつきりいやな顔してるじゃあねえか。

たぶん女子に毛嫌いされたこととかないんだな、だからわかんないのか。

なにそれ？爆発しろ！

「ねえ比企谷さん早く〜」

こんな時でも北山は平常運転だ。

ほのかは相変わらずあたふた。

司波は…

司波は…？

ゾクリ！

ナニアレコワイ

何で笑顔があんなに怖いのか？

ここ最近の森岡の態度について堪忍袋の緒が切れたのだろうか…

しかもなんであの笑顔を見て森岡たちは普通に会話できるの？  
鈍感ってうらやましい…

「わかりました、幸いちょうど教師の皆様も今日は自由にいいと言っていますし、対戦形式でしませんか？」

そう、今日は初めの授業ということで魔法を使おうがなにしようが自由な時間なのだ。

「うん、それでいいよ、形式は4対4でいいかな？」

「ええ、ですが怪我などさせてしまつては危険ですので、魔法を当たつた人はその時点で負けということにしましょう」

悪魔で（誤字ではない）にこやかに会話をする司波…

この状況で司波の顔を見て恐怖しない人間は森岡と北山だけだ。  
森岡と同じグループのやつも、光井だつて軽く震えていた。

「じゃあ作戦会議をしますので開始は3分後でお願いしますね」

優雅に頭を下げ、光井、北山、俺を呼び寄せる司波。

ふええ、怖いよ、小町助けて！

そして行われる作戦会議

司波の立てた作戦内容のほうもかなりえげつない方法であったが  
最後解散ぎわにはなつた言葉はそれ以上に恐ろしかった…

恐ろしすぎて内容を忘れてしまつほどだ…。

俺は覚えてない、司波が

「これで昨日お兄様を貶した報復を合法的にすることが出来る……」

なんて言っていたことなんて…

これから起こるであろう悲劇に、加害者から被害者に向けて、合唱

…

風の刃が迫る…

いや、直撃しても吹っ飛ぶだけなのだから空気の塊といったほうが正しいのかもしれない。

それを俺は魔法で自分の体の運動能力を上げて避けていく。

司波は同じように避け（こっちは魔法を使っていないため素の運動能力）、北山は空気の塊を作って相殺、光井は光の反射を利用して相手から見える自分の位置をずらしているようだ。

相手は4人と同じ技を開始直後に放ってきた。

それは当たり前といえば当たり前のことである。

風系の魔法は基本的に術式の構築が早く、技の発生も早い。

だからこういような初撃で決着するよような戦いにおいて大きなアドバンテージなのだ。

そんな中われらが氷の女王（絶壁じゃあない）が提案した作戦はまず30秒間の徹底防戦だった。

そして30秒が終わり、恐怖の時間が始まった

「皆さん、行きますよー！」

さあ、お兄様を馬鹿にした愚かな人たちには少し痛い目にあってもライマシヨウ…

1人がそれぞれ1人を相手にするということは事前にグループ内で決めていたため私の標的…：相手である森崎君にのほうを向きCADを構える

使う技は先ほど彼らが使っていたものと全く同じ魔法。

それをタブレット型のCADを操作して3連発で放つ、3発ともあたらずにそのまま後ろの壁を振動させた。

彼は安心したようだ。

私はまた3発連続で放つ、後ろの壁を振動させただけだった。

彼は少し余裕を取り戻したのか、自信に満ち溢れた顔になってそのまま風の塊を飛ばしてきた。

私はまた3連発、そのうち1発は彼の魔法と当たったが相殺どころか私の魔法を一瞬でも止めることはできていなかった。

相変わらず後ろの壁が揺れる。

彼は眼を剥いた。

何か言っているようだが私にはまったくもって興味のないことだった。

また3連発、壁が揺れる。

彼の顔はついに恐怖がにじみ始めていた。

3連発…壁が揺れる

3連発…壁が揺れる

3連発…壁が揺れる

サンレンパツ…カベガユレル…



こわ!?こわ!?コワッ!?

なにあの人ホント怖い…

もちろんこれは先ほどまで自分に向けて魔法を放っていた名前も知らないクラスメイトのことではない。

味方のはずの少女に俺は心底恐怖を抱いていた。

やめて!もう森何とか君のライフはゼロよ!

ちなみに30秒逃げ切った後の作戦は各個撃破だった。

仮に先に敵を倒したとしても絶対にほかの人の手助けはしない。

あと、絶対に負けられない。

司波のやつに「負けたらどうなるかわかってますよね?」なんて最高の笑顔で言われた日にはうれしすぎて体が震えてくるレベルだ(白目)

そんなこんなで俺たち3人は遠目に司波の戦い(一方的な虐殺ともいう)を見ていた。

……もちろん勝ったよ?

俺だつてまだ死にたくないもん。

授業は残り4分

森なんかのやつはこの4分間をどれくらいの長さと感じてるのだろうか?

少なくとも司波は怒らせてはいけなことを心に刻み、気持ちを無にして前方の魔法戦を眺めつづけた。

やはりどうして俺が巻き込まれるのかわからない

同日放課後、なんか毎日来ているような気がしたが今日も今日とて生徒会室に来ていた。

「じゃあはんぞー君と司波君、比企谷君でバトルロイヤルね」

「はあ？」

そして会長がそんなふざけたこと抜かしたのは生徒会室に来てから15分のことだ。

気持ちの整理を付けるためにここに来るちょっと前からその15分のことを振り返ってみよう。

「比企谷君、いる？」

本日最後の授業が終わった瞬間に教室の出口にはこの学校の学生の中で最高権力の持ち主が立っていた。

うあ何で今日も来たんですか…

どうしよう、隠蔽魔法使って逃げようかな…

俺の隠蔽魔法使えばその魔法もついでに隠蔽されるし、もともと隠蔽スキルあるから最強の隠蔽になるんだが…

隠蔽隠蔽言いまくって自分でもよくわかんなくなってきた…  
っていつか学内で俺が魔法を使ったらどうなるのだろうか？

学内は基本的に魔法の使用は禁止である…だけにかかわらず一般生徒のCAD携帯すら禁止されていたりするのだ。

俺みたいにCADが一般の物でなく、企業と専属契約で与えられたものに限っては情報漏洩の可能性がある場合その限りではないが…

結局その時でも学内で魔法を使ったら校則違反、学外で使うと法律違反になるのだが魔法を感知されない俺にはあまり関係ない。

でもまあ、行くしかないか…

さっきから会長はずっとこっちの方見てるし…

さすがに魔法の痕跡が残らないからと言って目の前で消えたら魔法使ったとばれて、このままついていくよりも長い時間拘束されることになるだろう。

こっつして生徒会室まで連行された。

相変わらず男子からの目は痛かった…

「比企谷、お前も来たのか…」

生徒会室に入ると、入り口近くで苦笑いしながら司波兄…

「お、おう…会長さんに呼ばれたんで…」

「……………ですから…」

奥の方では司波妹のほつが制服のラインの色から判断して男の先輩と言いつい合ひもどきのことをしてしているようだ。

午後の授業の一件があつたため司波妹に対する恐怖が若干あつたりする。

「あの抗争の3割はお前の責任だぞ？比企谷…」

目線で俺が言い合ひに注目していることが分かつたのであろう、司波兄はそう言つた。

「なぜだ…俺が何を…もしかしてお前の風紀委員の話か…？」

「ああ…」

ドウモスイマセンデシタ…

「まあ、俺帰つていいかな？関係ないし…」

「比企谷、お前つてなかなかひどいやつだよな…」

いや、だつて関係ない人間がいて周りの邪魔をするなんてことできないし…

あ、そもそも俺の周りには基本的に人いませんでした（テへ

うん、結局帰ろう！

そんな瞬間だつた、例のセリフが聞こえてきたのは…

あれ？結局なんで俺まで巻き込まれたのかわかんなくない？

「会長、俺までなんで戦わなきゃいけないんですか…？」

「あら、比企谷君私がかここまで連れてきたのはそのためよ？あなたの実力が知りたかったからここまで連れてきたのだけど？」

小首かしげながらそう言う会長…

あざとい、1発で看過できるようなあざとさだった。

まるで容器が簡単につぶせる水レベル…

自分で言っておいて何言ってるのかわからない…

だが隣にいた先輩には効果抜群であったようだ。

「か、会長の言うことであれば僕は従います、その2科生に実力の差を教えるいい機会ですから…」

うわー、この人ちよるいな

ってどうかこの先輩も司波のことしか眼中にないようだからやっぱりおれは帰りたい。

ちらっとスマホで時間を確認すると小町が学校から帰ってくるには少し早い時間だった。

「一応聞きますが、俺がこの勝負を受けるメリットは？」

そう会長に問う。

会長はにんまり笑って、こういった。

「メリットはありませんよ？ですが受けなかったときにデメリットは生じますけどね？」

教師よりも権限のある生徒会長…

そんな人にこんなことを言われて逃げることもできるほど、俺は先を見通せない人間ではなかった…

ってなわけで第3演習室に移動する俺たち、その間に司波兄妹がいちやついていたが目視すると小町に今すぐ会いたくなってしまっため極力そっちの方向は見ないようにした。

第3演習室は縦長の構造をしておりかなりの大きさがある。

ちなみに先ほど魔法実技の時間4対4の戦闘(司波妹の虐殺とも言う)を繰り広げたのもこの第3演習場だったような気がする。

「あ、あれ？司波君はいつも複数のストレージを持っているのかしら？」

気になったのだろう、会長はそう司波に尋ねた。

「ええ、汎用型を使いこなせるほど処理能力がないので…」

そう言う司波の口調は謙遜や萎縮したというものはなく、いつものように淡々と事実を言うようなものであった。

一方の副会長は司波のその言葉を鼻で笑い、自信満々の顔をしていた。

あ、なんかデジャビュ…

司波妹が何回か魔法を外した時に見せた森下と同じ顔をしていた。

どこかの誰かが勝負は始まる前に終わっている、的なことを言っていたが、もしそうなのだとしたらこの勝負で副会長が勝つことはないだろう…いや、知らんけど。

「では、ルールを説明する。」

そう、風紀委員委員長である渡辺先輩は切り出した。

どつちやらの試合の審判は彼女が引き受けるらしい。

「相手を死に至らしめる術式、並びに回復不能な障害を負わせる術式は禁止、直接攻撃は相手に捻挫以上のけがを与えない範囲であること、武器の使用は禁止、素手による攻撃は許可する、勝敗は自分で負けを認めるか、審判が続行不可能と判断した場合に決する。ルール違反は私が力づくで処理するから覚悟しろ」

よし、言質は取れた。

渡辺先輩の試合説明をして心の中でガッツポーズをする俺。

ぶっっちゃけこんなの適当にやって帰りたいところだが、だからやらって小町の下校時間よりも遅くに帰ることになってしまっただけは大変だ。

わざと負けるなんてものは論外である。

導き出される答えは俺が速攻で倒すしかない。

……あめんどくと…

だいたいそもそも何で魔法科の人間は戦うのがこんなに好きなのだろう？

司波の実力が見たいのだったら実習期間でも設けて試してみれば

いいだろう。

そもそも俺が闘う意味が全く持ってわからなかったりする。

俺はただ何事もなく学校に通えたら…いや、できればそれもせずに家中に引きこもっていたい。

### 閑話休題

そんなことよりも冷静に考えたら司波に勝ち目などあるのだろうか？

魔法士の勝負といえば先に魔法を当てたほうが勝つ。

これは当たり前だ。

魔法を一度当ててしまえば相手は吹き飛ぶ、またはひるんだりする。

その間何もできない相手に対して攻撃したほうは次の魔法の準備に入ることができるのだ。

つまり一度攻撃当てれば滅多打ちなわけだ。

CADからの魔法発動では魔法力の高い一科生である俺や副会長のほうが圧倒的に高いはずである。

だからこそ心配こそすれ、負けるとは微塵も思っていないであろう司波妹の態度が分からなかった。

考えられる可能性として俺と同じBS魔法士であるか、魔法以外…それこそ地の肉体勝負に優れているかのどちらかだろう。

ここは安直に攻撃を仕掛けてはいけない。

俺の腐った目から収集した情報をもとに脳はそう判断を下した。

渡辺先輩は俺たち3人の顔を交互に見て右手を上げる。

その右手が振り下ろされたときこそ勝負の開始だろう。

だからこそ俺はこの時に魔法を発動させる。

そうしてついにその時が来た。



「はじめ!!」

まず司波が動く、俺と副会長の間を指すようにおおよそ一般人には出すことのできないスピードで移動した。

後者か！

その瞬間俺はそう思う。

というか軽く残像が見えたぞいま…

リアル残像拳なんて初めて見た…

もちろん俺はそのスピードを目でとらえることはできたが反応することなどできなかった。

副会長は眼を見開き、小刻みに震えていた。

「は??」

何が起こっていたのだろうか？

目でとらえた限りでは司波は高速移動中に俺と副会長に3発ずつ拳銃型のCADの引き金を引いていた。

つまり何らかの魔法を発動したはずだ。

俺が内緒で試合前から発動させたのは肉体強化魔法…厳密に言えばそうではないのだが効果的にはそれほど変わらない。

そのおかげで俺は副会長のようにシャブ中みたいな状態にならずにすんでいるのだろうか？

考えていても司波の使った魔法がどのようなものであるかわからないのでは答えは出なかった。

そのまま倒れた副会長を役員の人たちが道の隅にどけ、その間に司波が話しかけてきた。

「比企谷…お前は何かしたようだな」

「いや、俺でもなんでお前の攻撃防げてるのか分かんねーし…てかお

前がなんの攻撃したのかもわかんねーよ」

冷静に俺のほうに向き合ってくる司波。

「魔法展開するよりも早く撃つたはずなんだが…って比企谷お前もしかして…」

俺が事前に魔法を展開していたことに気が付いたようだ。  
だがそんなときのために先ほど言質をとっておいたのだ。

「何のことだけ？でも渡辺先輩は言っていたよな『ルール違反は私が力づくで処理するから覚悟しろ』って」

ばれなきゃ犯罪ではない、これもどっかの誰かが言っていたセリフである。

「お前は悪いやつだな…」

ほっとけ！

そう言いながら片手でViOa型CADのボタンを操作する。  
使うのは自己加速術式。

ちろっと時計を見るとタイムリミットまではだいたい5分といったところだった。

ん？

……5分???

ってやばい!?

「じゃあ比企谷、お前の「スイマセン！渡辺先輩、俺はサレンダーします!!ホント時間ないのでこれで失礼します」っておい!？」

司波のやつがなんか言っていたようだがそんなもんは無視。

これだけは譲れない一線なのだ。

俺の1日の中で最も重要な役割なのだから。

使用した自己加速術式をそのままに俺は急いで演習室から飛び出す。

念のため走りながら光学迷彩の術式も展開。

途中でサレンダーして逃げたのだ、なんといわれても仕方ないが会長の言っていたデメリットの件に関してはどうにかなってほしいと願い、そのまま魔法科高校の敷地から飛び出した。

小町の通っている中学校を目指して。